ＦＭぐんまと当協会の共同制作番組

チャレンジ・ザ・ドリーム
～群馬の明日をひらく～

平成28年１月７日（第34回）放送

当協会は、平成25年度より、FMぐんまと共同制作番組を毎月1回放送しています。創業・起業の応援をメインテーマとし、群馬発の大企業のトップインタビューを中心に構成しています。
放送内容は、当月報に掲載するほか、当協会のホームページでも公開いたします。

【プログラム】
●トップインタビュー
カネコ種苗株式会社
金子昌彦社長
●群馬県からのお知らせ
群馬県の産業人材育成策について
●チャレンジ企業コーナー
あぜみち＆千代田饂飩®
◎アナウンサー　奈良のりえ

●プロローグ

明けましておめでとうございます。ご案内役の奈良のりえです。夢への挑戦をテーマに明日へ向かって走っている人を応援する番組「チャレンジ・ザ・ドリーム」。今年も企業トップへのインタビューなどを通して、元気の出る話、参考になる話をご紹介していければと思いますので、よろしくお願いします。さて、新年最初のトップインタビューは、業界１位の売上高を誇る前橋市のカネコ種苗株式会社の金子昌彦社長です。カネコ種苗は明治28年（1895年）の創業で、３代目の金子才十郎社長が戦後、急成長させ、海外にも事業所があります。現在の昌彦社長は群馬県の職員でしたが、縁あって30代でカネコ種苗に入社。従業員およそ600人の会社のかじ取りを行っています。企業の成長のポイントや、経営に対するお考えなどを伺っていきます。そして、番組後半は訪問インタビュー。30代の男性がこだわりのうどんを提供している 千代田町赤岩のお食事処「あぜみち＆千代田饂飩®」に出かけ、お話を伺ってきました。

●トップインタビュー

カネコ種苗株式会社
金子昌彦社長

———業界１位の売上高を誇る前橋市のカネコ種苗株式会社の金子昌彦社長に、FMぐんまのスタジオにお越しいただきました。どうぞよろしくお願いします。
（金子社長）よろしくお願いします。

【群馬県庁職員時代】
———金子社長は富岡市のご出身だそうですね。
（金子社長）はい。お町の子ではなくて、田舎の子です。
———富岡市ということで、お父さまとお母さまは何かご商売をされていましたか。
（金子社長）父は勤め人でしたが、若干農業もやっていまして、いわゆる３ちゃん農業というので、少し自分の家で食べるものとか、そのぐらいの農業ですね。
———金子社長も農業を手伝ったりしていたんでしょうか。
（金子社長）はい。大学が東京だったんですが、それまでは家でいろんな農作業とか、手伝いをしていました。
———では、高校時代ぐらいまでということですか。
（金子社長）そうです。
———じゃあ小さいころから結構、畑とか土いじ

りにもたずさわっていたと。
（金子社長）ええ、結構好きだったですね。
———大学卒業後なんですが、群馬県庁に入庁したそうですね。
（金子社長）はい。
———当時はどのような将来設計をされていたんですか。
（金子社長）パブリックサーバントですね。公務員として世の中のお役に立つような、そういった仕事をしていきたいなというふうに思っておりました。
———県庁ではどのような仕事をしていました？
（金子社長）最初に配属されたのは地方課の行政係というところで、市町村の行政のお手伝いっていうんですか、アドバイスするような、そういったところでした。その後は、人事課へ行きまして、職員の福利厚生とか、そういった仕事をしておりました。
———現在の社長職をなさるのにあたって、何か県庁でお仕事していたことが役に立ったなということはあります？
（金子社長）そうですね、まあ、直接というのはなかなかないんですが、そのときの仲間たちといろいろ勉強会みたいなのをやっていまして、今でもそういうのは続いておりまして、仲間に入れていただいております。
———ああ、そうですか。で、このころというのは、カネコ種苗のことは知っていたんですか。
（金子社長）まあ、知っておりましたけれども、ただ仕事上は関係がなかったので、詳しい内容まではわからなくて、会社の名前と、社長の名前ぐらいだったですかね。
———当時社長だった創業家３代目の金子才十郎さん、現在の相談役の娘さんと結婚をして、その後、カネコ種苗に入社したそうですね。
（金子社長）はい、そうです。
———この奥さまとの出会いというのは？
（金子社長）何しろ昔のことですので、あまりよく覚えてないんですけど、確かレクリエーションでテニスの大会か何かあって、そのときだったんじゃないかなというふうに思います。まあ、社内結婚ですね。
———ああ、そうなんですね。
（金子社長）はい。
———それがある意味、金子社長の人生のターニングポイントになった、奥さまとの出会いが。
（金子社長）結果的にそういうことだと思いますね。はい。

【カネコ種苗株式会社に入社】
———昭和62年（1987年）にカネコ種苗に入社されました。……としますと、金子社長、大体何年ぐらい県庁にお勤めされていたんですか。
（金子社長）はい。９年間いまして、当時は10年すると、主任とかになれたんですが、まあ、もったいなかったなという感じですね。
———未練はなかったですか。今、もったいないとおっしゃいましたけど。
（金子社長）それはなかったですね。やっぱり新しいことにチャレンジしていくっていうのは非常にいいことだと思いますので。
———そして、入社したのは何歳のときですか。
（金子社長）31歳です。
———新しい人生が始まるような感じですね。
（金子社長）まあ、そこまでの勢いもなかったんですけど。
———あ、そうですか（笑）。
（金子社長）はい。
———当時の会社の様子というのは、金子社長、覚えていらっしゃいます？
（金子社長）覚えています。当時は今よりも、時代背景もあって、少しのんびりしていたかなという感じですね。
———その中で、金子社長はまず入社して、どのような仕事に就かれたんですか。
（金子社長）最初は、当時の社長の方針で、基礎からやれということで、倉庫に入りまして、それから種採りで畑ですね、畑回りをしまして、それから営業もやりましたし、それから、会社の数字を見るようなこともしまして、まあ、一通りのことはやったということですね。
———もう基本的なことからスタートしたということなんですけど。
（金子社長）はい、そうです。
———今お話があった畑回りの仕事っていうのは、これは実際にどんなことをしたんですか。
（金子社長）種採りで、農家に委託して種を採ってもらうので、それの指導とか、集荷だとかをやっ

ていまして、４トン車を運転していったこともありました。

———それは群馬県内の農家の方との契約ですか。

（金子社長）県内だけじゃなくて、千葉だとか、茨城とか、いろいろありました。

———ご自身で４トントラックに乗って、種を採りにいくんですか。

（金子社長）ええ。まあ、４トンはあまり運転しなかったですけど、１トン車が中心ですよね。品質検査をして持ち帰るという格好ですね。

———そういったところでは、基礎的なことをさまざまなことからスタートしたということですが、ご自身が積極的に学ぶような姿勢も持って取り組んでいらしたんですか。

（金子社長）そうですね。やっぱり仕事が楽しかったですね、いろんなことをするのが。自分にとって新しいことは非常に面白いことですね。

———結構チャレンジングな性格だと思います、ご自分のことを？

（金子社長）ええ、見かけよりはそうだと思います。

———見かけよりは（笑）。確かにこう、雰囲気としてはとても真面目で、実直で、誠実でというような感じで。

（金子社長）そういうふうに言っていただけるとありがたいですけど。

———そしてさらには県庁にいらしたということで、管理するようなお立場でずっとなさっていたのかなと思いますが、結構アクティブですね、社長。

（金子社長）ええ。私、現場大好きですから、自分でやったほうが面白いですね。

———ああ、そうですか。そうすると、今のお立場は、ちょっとなんか、もう少し体を動かしたいなんて思ったりすることもあるんですか。

（金子社長）そういう部分はありますね。

———そうですか。やっぱり現場を見るということは大切ですか。

（金子社長）ええ。大切だし、面白いですね。

———面白い？

（金子社長）もう全てが現場にありますから、いろんな発見があって、楽しいですね。

【前社長・金子才十郎氏について】

———現場を見てきた、その後なんですが、社長室長をされていますけれども、社員として見る金子才十郎さんのお姿というのは、どのように映りましたか。

（金子社長）そうですね、当時は現役の社長をやりつつ、業界、日本種苗協会という団体がありまして、そこの会長もやっておりましたし、あとは商工会議所、さらにほかの公職も同時にたくさんのことをこなしておりまして、タフだなあというふうに思いました。また、人脈の広さっていうんですか、それから、取引先からの信用の高さですね、こういったことには非常に驚かされました。当時から、時代に先んじてハイテクと国際化というのを旗印にやっていたんですが、新しい技術に対する関心だとか、海外へのまなざしですね、こういった点で、企業人としての仕事に対する姿勢っていうんですか、あとは、時代の先を見る目っていうんですか、そういうのは今でも非常に参考になっております。

———例えばその時代の先を見る目ですけれども、金子社長が見て、どんなところが、金子才十郎氏の時代の先を見る目があるなというふうに思われました？

（金子社長）要するに、これからどんどん変わるんだぞと、今の景色を見てちゃ駄目だぞということですね。ですから、新しい研究所をつくったり、最新の倉庫をつくったり、そういう設備投資もかなりやってきましたし、海外展開もかなり早かったんじゃないかなというふうに思います。

———これ、農業の国際化ということですか。

（金子社長）ええ。農業というか、我々は種苗業者ですので、種苗業の国際化ということで、今、種も９割は海外で採種しておりまして、また、輸出のほうも世界中に輸出していると、そういう産業になっていますので、業界自体はそんなに大きくないんですけれども、国際展開というのは非常に早かった業界だというふうに思います。

———平成５年（1993年）に取締役に就任しまして、経営に参画していきますが、それらのことを伺う前に、ここで１曲お届けしたいと思います。金子社長に１曲選んでいただきました。どんな曲ですか。

（金子社長）はい。上條恒彦の『だれかが風の中で』という曲なんですが、私、マカロニウエスタンが

好きで、ジュリアーノ・ジェンマが好きだったんですけれども、なんかどっか被っているところがありまして、これ、『木枯し紋次郎』というテレビドラマの主題歌なんですが、あれは舞台が群馬県の三日月村でもありますし、「花燃ゆ」で群馬が映ると、砂ぼこりが上がってくるんですが、どうもそういうイメージとも合っているんですね。割と好きな曲です。

———なんか群馬の、上州のからっ風も感じるようなそんな１曲なんですね。

（金子社長）はい。

———ではお届けいたしましょう。上條恒彦の『だれかが風の中で』。

【新しい取り組み】

———平成５年（1993年）に取締役に就任されました。このときはどんなお気持ちでしたか。

（金子社長）今まで社員という立場から、経営陣に加わったということで、責任の枠っていうんですか、それがぐっと広がったなあというふうに感じました。今までは社内に対する責任ということでしたが、社外にたくさんのステークホルダーの方がいらっしゃいますので、そういったところに対する責任ということで、グッと引き締まるなという感じだったですね。

———その中で、新しい取り組みも積極的にチャレンジされましたよね。

（金子社長）はい。私が会社に入る少し前ぐらいに、バイオブームというのがありまして、例えば１本の苗から何万個も実が採れるトマトだとか、土の中がジャガイモで、上がトマトで、ポマトというような植物だとか、あとは人工種子だとか、そういった種苗が世界を変えるというような取り上げ方がされた時期がありまして、ちょうどその当時、当社では伊勢崎にバイオテクノロジーの専門の研究所をつくりまして、研究を始めました。何をやったかというと、主にイモ類ですね。これの病気が入ってない無病のもの、ウイルスフリーって言うんですが、そういったものの研究を始めまして、併せて植物工場の研究もやったわけですが、イモのほうは、それが実用化されて、いよいよ売れそうだといったときに、それを生産して販売する部署がないということで、新しくその部署を立ち上げて、私がそのときに、たまたま部長になったというようなことです。

———金子社長、種苗メーカー、種屋さんがおイモをつくったんですか。

（金子社長）そうです。たぶんですね、種屋でイモをやっているのはうちの会社だけで、オンリーワンになるわけですけれども、当社はウイルスフリーを中心にやっていまして、それが進んできて、今度は品種改良のほうまで入りまして、一般の野菜というのは、育種をするのに大体10年ぐらいと言われているんですが、イモのほうは10年以上かからないと一つの品種ができないというようなことで非常に息が長いんですが、おかげさまで現在、そのナガイモ、「ネバリスター」っていうナガイモみたいなものですが、それと、サツマイモ、「シルクスイート」というサツマイモですが、こういったものがだいぶ世に出回るようになりまして、成果が出てきたなというところです。

———これ、ある意味、業界としても画期的だったのではないですか。

（金子社長）そうですね。大体イモ類は、国の機関、あるいは都道府県の試験場ですね、こういったところしかやっておりませんので、民間がそういうものを出したというのは、非常にニュース性があって話題になりました。

———それも、10年かかるんですよね。

（金子社長）ええ、10年以上ですね。

———成功するかどうかわからない10年ですよね。

（金子社長）そうです。経営者も研究員も、我慢比べというのが我々の業界の仕事ですので。

———これは大きなやっぱり分岐点にもなったというか、今後を指し示す一つのポイントになったんでしょうか。

（金子社長）そうですね。やはり会社の特徴として、研究開発型の企業というのを目指していますので、

そういった面では一つの核ができたということだと思います。

———研究開発型の会社というのは、オンリーワンの技術というのを求めていかなくてはいけないものですか。

（金子社長）そうですね。これはかなり重要な点だと思います。

———そしてそれは、求め続けなくてはいけないものなんですか。

（金子社長）そうですね、これはもう永遠にやっていかないといけないことだと思いますね。

———そういう意味で、今、カネコ種苗が取り組んでいることも、またあるんですか。

（金子社長）今までの継続が基本的には多いんですが、育種のほうでは牧草関係、あまりなじみがないと思います。

———牧草？

（金子社長）牛だとか鳥だとかに食べさせるやつですね。あとは肥料ですね。緑肥と言いまして、肥料にする草ですね、そういったものの育種、これもやっている日本ではほとんどないような状況ですので、新しい取り組みとしては、そういうことをやっております。

———育種とは、これ、どういうことですか。

（金子社長）キャベツならキャベツで、いろんな品種があるんですが、そういう品種をつくっていくということを育種と言っています。

———なるほど。とにかく日本ではまだないとか、世界でも初めてということを取り組んでいらっしゃるわけなんですね。

（金子社長）そうですね。意外と地味なんですけど、やっていることは先端的なことをやっておりまして。

———本当にそうですね。また、そういうオンリーワンの技術を、とにかく革新し続けなければ、企業としてはやっぱり……。

（金子社長）生き残っていけないということだと思いますね。

———厳しいですね。

（金子社長）はい。厳しいけど、楽しいですね。

———厳しいけど楽しい？

（金子社長）はい。

———困難を乗り越えるって、楽しいことですか。

（金子社長）非常に楽しいと思いますね。

———ああ、そうですか。

（金子社長）はい。特に、生命を扱っていますので、そういった面での楽しさというのはあると思います。

▲サツマイモ「シルクスイート」

【社長就任】

———平成24年（2012年）に社長に就任されました。このときは、どのような抱負を持って社長に就任されましたか。

（金子社長）企業というのは活力が大事だというふうに思います。当社はいろんな部門から成り立っておりまして、それぞれの部門で前向きの新しい話題が発信できるということが、非常に大事なことだろうなというふうに思っています。当社は割と自由闊達な社風というんですか、任せている部分がありますので、それの前提として、仕事は私がするわけではありませんので、皆さん、各部署の方がやっていただいているわけで、風通しがいいということが非常に大事なのかなというふうに思って、それは心がけてやっております。

———その風通しのよさというのを、全体に、皆さんにわかってもらうために、社長ならではの、なにか取り組みとかもされましたか。

（金子社長）特にはないんですが、最初は社長室のドアを開けておいて、いつでもいいから入ってこいよと言っていたんですが、なかなかそういうのもないので、それはやめにしまして、なるべくいろんな機会で、ちょっとつかまえて食事に行ったり、そういったことをやっております。

———ああ、そうですか。

（金子社長）自分なりにはニコニコ草っていうんですか、そういう草を自分の中にたくさん増やしていこうかなというふうに思っていまして。

———心の中に、ニコニコの草をたくさん？

（金子社長）そうです。ニコニコ草というのは、年賀状なんかにも書いているんですけど、ニコニコの顔がこう、ヒマワリみたいにいっぱい。
———ああ、かわいい（笑）。
（金子社長）まあ、そんな気持ちで。
———そうですか。いつもニコニコ草を心にたくさん増やそうと思って。
（金子社長）そうですね。そうすると、コミュニケーションがうまくいくんじゃないかなと。
———理想の経営者像というのは、どのようなものがありましたか。
（金子社長）よく、本だとか、テレビだとか、いろいろ素晴らしい経営者の方はたくさんいらっしゃるかと思いますけれども、社長になってからは、あまりそういうことはこだわらないほうがいいのかなというふうに思っています。
———こだわらない、それはどうしてですか。
（金子社長）やっぱり全部条件も違いますし、環境も違いますし、あまり「これはこうだ」というふうに思っちゃいますと、頭が固くなったり、自分を見失ったり、そういうことになっちゃうんじゃないかなという気がしまして、あまりそういったことはこだわらなくていいんじゃないかなと思います。
———社長に就任するのにあたって、何かそういう哲学を学んだとか、そういうのはありましたか、本を読んだとか。
（金子社長）割とそういうのはなくて、私の場合には、非常にいい先生といいますか、が近くにいましたので。
———いい先生というのは？
（金子社長）今の相談役ですね。ずっとそばにいて見ていましたので、そういったことが一番参考になっているのかなと思います。
———どんなところが一番参考になりましたか。
（金子社長）やっぱり決断力だと思いますね。
———決断するときの決め手って、何だと思いました？
（金子社長）単純には決断できませんので、きちんとした情報収集力ですね。情報収集力というのは、人脈にも通じますし、幅の広さ、それから時代を見る目ですね、そういったことなんじゃないかなと思います。
———常に先を見る目というのも、やはり持っていなくてはいけない。
（金子社長）ええ。それはやっぱりセンスじゃないかなと思いますけどね。
———センス、難しいですね。
（金子社長）ええ。
———さて、社長就任から３年余りがたちました。振り返ってみていかがですか。
（金子社長）はい。これも、毎年同じことはなくて、毎年いろんな課題が出てきて、状況も違うんですよね。時代はどんどん動いていて、世の中っていうのはすごく変化しています。企業自体も生きているんだなと、実感しています。
———はい。
（金子社長）中国の『貞観政要』という本に「草創と守成、いずれか難き」という言葉があるんですが。
———はい。どういう意味ですか。
（金子社長）国家も会社も、つくるときの苦労、それからそれを維持して発展させていく苦労、どっちが難しいんだというような問いなんですが、結論的には、もうつくっちゃったものは、どんな苦労があっても済んだことだし、これからしっかり頑張っていけよというような、そういう意味だろうというふうに理解していますけれども、これからも、今、現相談役がよく言っていますが、「流れに従い志を変えず」、それからイノベーション、それから鳥の目、虫の目の話というようなことですね。そういったことを心に刻んで、オープンで活力のある会社、これを目指してやっていきたいというふうに思っています。
———今後もどのようなイノベーションを起こしてくださるのか大変楽しみなんですが、この後も、コマーシャルを挟んで金子社長にお話を伺っていきます。

【趣味の山登りについて】

———少し仕事から離れたお話も伺えればと思います。山登りが社長、趣味だそうですね。
（金子社長）最近、あまり行けてないんですよね。
———忙しくてですか。
（金子社長）ええ。春に信濃川の源流に行ったのが最後です。
———どこの山を？
（金子社長）甲州と武州と信州の境のところにあ

る甲武信岳っていうのが、源流になっていまして、そこへ行ってきました。

———標高、どのぐらいですか。

（金子社長）よく覚えていませんけど、2,000メートルぐらいじゃないかなと思います。

———いいですね。やっぱり自然に触れたりとか、山に登ってちょっとリフレッシュするということも、お忙しい中でも大切にしていらっしゃる。

（金子社長）はい。山の思い出は楽しいことばっかりで、特に３年ほど前に行った長野の常念岳は、非常に思い出深かったですね。

———どんな思い出があるんですか。

（金子社長）雲の上や、霧の中に自分の姿が映る、ブロッケンという現象なんですけども、これがそのとき出まして、常念岳の山頂から槍ヶ岳へ向けて、自分の姿が雲の上に映っている様子が、非常に素晴らしかったです。あと、霧の中に自分の姿が映るのもあるんですけど、それは自分の周りに後光が差しているような、そういう情景になりまして、非常に感動的だったですね。

———すごい幻想的、その場所に行かなければ見られない風景ですよね。

（金子社長）はい。ですからそういうのを見ちゃうと、また行きたくなっちゃうんですね。

———アクティブですね、社長。

（金子社長）そうでもないんですけど。まあ、地味な趣味はほかにもありまして、先月、古墳の石室というのがあって……。

———王の墓ですね。

（金子社長）そうです。そこに使われている天井にある石が60トンぐらいあるんですが……。

———60トン、ええ。

（金子社長）それをどこから持ってきたかというのを探るバスツアーに参加してきまして、烏川の上流の、山の奥まで行ってきましたが、これもとっても楽しかったですね。

———確かに群馬は古墳文化が栄えたところではありますけれども、古墳にもご興味がおありですか。

（金子社長）そうですね。毎月行っているところがあります。

———ええっ、毎月、古墳を見にですか、社長？

（金子社長）ええ、勉強といいますか。

———勉強会？

（金子社長）かみつけの里博物館というのが、昔の群馬町にありまして、そこへは足繁く通っているような感じですね。

———実は私も金子社長と初めてお会いしたのが、かみつけの里博物館のイベントのときで、駐車場でお会いしたという。私はそのとき、お仕事で行っていらっしゃるのかなと思ったんですけど、ご趣味と、あとは何かイベントのお手伝いなんだそうですね。

（金子社長）そうですね。あのときはたぶん古墳祭りだったと思いますけど、私は博物館友の会に入っていまして、ちょうどおでんを配っているときじゃなかったかなというふうに思います（笑）。

———まさかカネコ種苗の社長がおでんを配っているとは、お客さんも思わないでしょうね（笑）。

（金子社長）ええ、非常に楽しいんですね。

———やっぱりそういう趣味のお時間も大切にしての仕事なんでしょうか。

（金子社長）そうだと思いますね。

【種苗業界の変化】

———仕事の話にまた戻りますけれども、世の中が変わっていくという中で、種苗業界も変化しているんでしょうか。

（金子社長）はい。種苗の世界も、非常に品質面、高品質化というのが一気に進んでいます。また、国際化というのも、種を採る場所、それから販売する場所、これも非常に国際化が進んでいます。それから、昔は種苗で一体だったんですけど、今は種と苗というのがかなり分業してきまして、そういった部分でも変わってきています。あとは、農業自体のイノベーションがものすごく進んでいまして、昔の農業のイメージとは全く、もう様変わりしている状況です。機械化ですとか、省力化ですとか、あとは意識面ですね。もうかる農業っていうんですか、計数管理をして、経営意識を持って取り組む人がだいぶ増えてきましたし、それに伴って、大規模化だとか、よく言われている６次産業化だとか、マーケティングまで入れた農業っていうんですか、そういうふうに変わってきていますし、これからはさらにスピードを上げて変わっていくんじゃないかなというふうに思っています。

———そういった変化の中で農業を支えていくと

いう中で、種苗業界の役割というのは大きいですよね。

（金子社長） はい、そう思っています。種というのは、もちろん高品質であることが大事ですし、それから品種の特性、これが非常に大事で、それを使うことによって農家の収入にも直接影響してくるというものです。例えば量がたくさん採れる、あるいは品質のいいものが採れる、それから耐病性といいまして、病気に強くて農薬をあまり使わなくて済む、あとは、肥料をあまり与えなくてもいい場合もありますし、そういったことで種苗というのは非常に大切なものだと思います。それから、我々業界とすれば、品種の開発と、それからあとは栽培の面でどういう使い方をしていただくか、どういう流通につなげていくかというような、コンサルタント的な機能というのも非常に重要なことになってきます。特に最近はその情報面のサポートというんですか、そういったことが重要になってくるんじゃないかなと思っています。

———情報面というのは？

（金子社長） 要するに、その売り先の紹介、マッチングですね。それから生産も、一年中同じところで同じものができるわけではありませんので、暖かいほうから北へ向かって沖縄、あるいは鹿児島でつくって、順次北上していって、最後は北海道という、その間の生産をどういうふうにつなげていくかとか、そういったアドバイスなり、そういったことをしてやれるという会社が、これから必要になってくるというふうに思います。

———トータル的な、本当にプロデュースというか、支援になってくるわけですね。

（金子社長） ええ。それがないと、生産者のために本当の力になれないんじゃないかなというふうに思います。

———その中で、さまざまな部署がカネコ種苗にはありますけれども、各部署、日本一を目指しているそうですね。

（金子社長） ええ。会社全体では売上だけはトップになれたんですが、全部門がという話ではありませんので、会社の中で各部門が切磋琢磨して、一番を目指していこうよということで頑張っている現状ですね。

———そういった現状の中で、カネコ種苗の今後の目標は、どんなところに置いていらっしゃいますか。

（金子社長） はい。売上的には、おかげさまで１位にはなれているわけですが、利益面では、まだ上位の会社があって、及ばないところですね。そういったことで、利益体質の強化ということが大事だろうというふうに思います。ハイテクと国際化ということでやっておりますが、研究開発力、それから当社の持っているいろんな事業分野の総合力、それから営業網ですね、この営業展開力、それから海外に向けての展開と、そういったところを中心にやっていければというふうに思っています。

【起業家へのメッセージ】

———最後に、これから起業したいと考えている人へのメッセージの意味も込めてお話しいただければと思います。経営をしていく中で大切なことは、金子社長、あらためて何だと思いますか。

（金子社長） そうですね、やっぱり自分のセンサーを磨いて、人の後追いじゃなくて、まねじゃなくて、しっかりと地面を足で踏んで、進取果敢に踏み出していくと。そうすれば道が開けてくるんじゃないかなというふうに思っています。

———確かにセンサーが鈍っていては、時代の先を見ることはできないですものね。

（金子社長） そうですね。やっぱり経営者は勉強していかないといけないかなというふうに思います。

———そのほか、特に若い人に向けて伝えたいことなどもありましたら、社長、お願いいたします。

（金子社長） はい。これから経営していく方にお伝えしたいのは、うそを言わないこと、一生懸命やること、自信を持つこと、そして、自分で実際に現場に行くこと、そういったことが大事なん

じゃないかなというふうに思います。
———うそを言わない、一生懸命、自信を持つ、現場に足を運ぶ。やっぱり労を惜しんではいけないんですね。
（金子社長）そうですね。とにかく自分でやってみる、そういうのが説得力につながるというふうに思います。
———実行ですね。
（金子社長）はい。
———今日のトップインタビューは、業界１位の売上高を誇る前橋市のカネコ種苗株式会社の金子昌彦社長にFMぐんまのスタジオにお越しいただき、お話を伺いました。業界を担っていく立場として、これからも技術革新をなさっていくことと思います。今後のご活躍も期待しております。
（金子社長）ありがとうございます。
———さあ、それではここでもう１曲、お届けしたいと思います。今日は、とっても私も大好きなナンバーを選んでいただいたんですけれども、これはどうして選んでくださったのでしょうか。
（金子社長）ええ。今日は若い人にエールを贈るという意味も込めまして、この曲にしてみました。
———それではお届けいたしましょう。光ゲンジで『勇気100パーセント』。金子社長、ありがとうございました。
（金子社長）お世話になりました。

●群馬県からのお知らせ

群馬県の産業人材育成施策について

———ここからは、群馬県信用保証協会からのお知らせです。この番組は、夢に向かって挑戦する人、特に若者や女性を応援しているのですが、今日はそのような観点から、特別に群馬県産業経済部産業人材育成課の山越さんに、県の産業人材育成施策についてお話を伺います。山越さん、よろしくお願いします。
（山越さん）こちらこそよろしくお願いいたします。
———産業人材育成課では、特にものづくり分野の人材育成を推進されているとのことですね。
（山越さん）ものづくり産業は群馬の強みですが、このものづくり産業の将来を担う若い人材を着実に育成していくこと、また、製造現場の生産性向上に対応できる人材を育成していくことが重要であると考えています。
———具体的には、どのような取り組みを行っているのでしょうか。
（山越さん）前橋、高崎、太田の３カ所にある県立産業技術専門校、通称「産技専」では、ものづくり産業を担う若年技能者の育成を行っています。３校合わせて毎年200名を超える訓練生が県内の中小企業を中心に就職し、即戦力として活躍しています。また最近では、溶接や機械加工など、これまで女性が少なかった訓練科で学ぶ女性も増えてきました。

———県では現在、ものづくり女子応援事業を進めているとのことですね。
（山越さん）ものづくりの魅力を感じていただけるように、ものづくり女子を目指そうという、ウェブや啓発冊子の作成を現在進めています。産技専では、女子向けオープンキャンパスの開催なども企画しています。また、ものづくり分野で活躍する女性へのインタビューを紹介する番組を、今月から３カ月間、FMぐんまで放送しています。
———はい。毎週火曜日の午後６時40分から５分間、「ユウガチャ！」内で放送されるコーナーですね。ぜひ多くの皆さんに聞いていただきたいと思います。ところで、既に現場で働いている方に役立つ人材育成のメニューには、どのようなものがありますか。
（山越さん）産業技術専門校で開催しているスキルアップセミナーを、ぜひ活用していただきたいと思います。機械、溶接、電気など、製造業系の分野を中心に、初心者向けから検定対策応用編まで、幅広くメニューを用意しています。個別の企業のご要望に合わせて、訓練内容をカスタマイズできるオーダー型研修も、多くの企業にご好評を

いただいています。

———こうした研修が地域の身近にある産技専で行えるというのは、とても便利ですね。

（山越さん） そのほか、群馬県産業支援機構との連携により、ものづくり企業の現場改善や、生産性向上のため、群馬ものづくり改善インストラクタースクールを開校しています。修了生は、自社の改善活動の指導的立場で活躍したり、改善の専門家として県内の中小製造業に派遣されたりしています。

———この事業は、全国でも先駆的な取り組みとして、今年度のものづくり白書でも紹介されているものですね。

（山越さん） はい。現在は第９期の皆さんが太田地区で受講されています。ほかには、群馬県職業能力開発協会と連携して、技能検定という国家検定を推進しています。検定に合格した技能士がいることは、企業が高い技術力を持つ証明となり、取引先へのアピールにもなります。ぜひ多くの企業の皆さんにチャレンジしていただきたいと思っています。

———ものづくりの人材育成を通じて、群馬がますます元気になるといいですね。山越さん、今日はありがとうございました。

（山越さん） ありがとうございました。

●チャレンジ企業紹介コーナー

あぜみち＆千代田饂飩®

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」、続いては訪問インタビューです。今日ご紹介するのは、千代田町にあるお食事処「あぜみち＆千代田饂飩®」です。シェフの平井康裕さんは35歳。料理屋さんに生まれ育ち、郷土食であるうどんに目覚めました。数年前からお母さんのお店で千代田饂飩として試験提供を始め、今では全国からリピーター客が来るようになっているそうです。そんな平井さんは、20代で企画会社を設立。一時は教員も経験し、哲学書を執筆する哲学者でもあるという、多彩な経歴の持ち主です。そして、多彩なのは経歴だけではないんです。お店のメニューには、「さびうどん®」や、「わぽりたん®」、「かるわなーら®」なんていうメニューが並んでいます。しかし、それらのユニークな名前には、平井さんの独自の思いがあるようなんです。千代田町赤岩のお店を訪問して平井さんにお話を伺ってきました。

私は今、千代田町赤岩にある千代田饂飩に来ています。テーブルとカウンター、35席ほどのお店なんですけれども、この赤岩の渡しから歩いて３分ほどのところにお店があります。地域全体がとても風情のある場所です。今日は平井康裕さんにお話を伺います。平井さん、どうぞよろしくお願いします。

（平井さん） よろしくお願いいたします。

———まずお店に入る前に、のれんが格好いいですね。

（平井さん） ありがとうございます。

———これ、千代田饂飩の饂飩は、漢字が使われていますけれど。

（平井さん） はい。この漢字を使ったというのは、うどん自体が、日常的な食べ物なんですけれども、中国から伝来して、とても滋味豊かであるとか、そういった意味合いも含めたものが漢字に宿っているということで、漢字を使っております。

———店内に入りますと、手書きのメニューが目立ちますね。

（平井さん） はい。創り手の、思いをストレートにお客さまに感じていただいて、ご注文していただいたほうが、より素直だろうと思いまして、私のほうで手書きしております。

———そして、この千代田饂飩というデザインなんですけれども、そのロゴのデザインなどはどなたがなさっているんですか。

（平井さん） それも私が思いを込めて、つくり手の思いが伝わるようにと、デザインしております。

———もともとは、お母さまが始めたお店だそう

ですね。

（平井さん） もう13年たつのですけれども、母親が、「いろんな人生の集会場でありたい」ということで始めたお店です。

———平井さんは20代のころには企画会社を設立したそうですけれど、どんなお仕事をされていたんですか。

（平井さん） はい。食育のポスターであるとか、ランドスケープという店舗のデザインであるとか、あと、芸能人さんのマネージメントとかも含めてやっておりました。

———それがどうして、うどんを打ち始めたんですか。

（平井さん） はい。もともと料理人の家に生まれ育っておりますので、もう染みついて、「お料理」というものがありまして、その中で、あるときに、やっぱり料理の中でも地元に根差した食ということで、郷土食であるうどんというものを避けては通れないということを感じまして、その「風土を究めたい」ということで始めました。

———どのように、例えば打ち方であったりとか、そういったことを学んでいったんでしょうね。

（平井さん） はい。自分の記憶の中に、親戚のおじさんが打っていたおいしいうどんがあったんです。その人に１回だけ「さわり」を聞いて、そこから後はもう本当に、徹底して全国のうどんを食べ歩いて、その上で、「この風土に、本来あるべきうどん」というのは何なんだろうということを追及してきました。

———徹底的に食べ歩いたって、どのぐらい回ったんですか。

（平井さん） はい。お遍路をしながら讃岐はほとんど、八十八カ所歩きながら食べましたし、北は、稲庭も当然食べておりますし、その土地土地の風土に根差したものは食べてまいりましたね。

———そういった中で発見したこととか、気を付けたことはどんなことですか。

（平井さん） はい。やはりこの地域が、意外とやはりうどん文化と言いながら、本当のこしではなくて、「固いうどんをコシ」だっていうふうに誤解されている文化、これが実は今でも根強くあるんです。そのうどんを召し上がっていた方が、千代田饂飩を召し上がっていただくと、「これが本当のコシですね」ということを言っていただく中で、日々研鑽を積んできたというのが正直なところですね。

———太さなどはどうですか。やっぱりこれも何かこだわりがあったりとか、ご自身で気を付けていることがございます？

（平井さん） はい。今、うどんの市場で主流になっているうどんというのが、やっぱり田舎っぽさというか、「ナンチャッて田舎っぽさ」というか、そういうところをわざわざ出したいがために、わざと乱切りにしたり、そういうことをやっていて、故意に幅がまちまちとかっていうのがあるんですけれども、それはやっぱりちょっと、機械打ちと同じくうどん文化に失礼なんじゃないかなと思っています。

———そして、納得のいくうどんにたどり着いたのはいつごろですか。

（平井さん） 日々研鑽で、納得には程遠いんですけれども、お出ししても申し訳なくないなということを、御常連のお客さまに実際に試食していただきながらきたのが、本当に２～３年前ぐらいからお出しするようになっております。

———お客さまの反応はいかがですか。

（平井さん） はい。全国から口コミで来ていただくことも多くなりまして、非常にありがたく思っております。

———奇をてらわず、オーソドックスなうどんを追究してきたということが、お話から伝わってきたんですけれども、一方で、「さびうどん®」や、「わぽりたん®」「かるわなーら®」といった変わった名前のメニューがたくさんありますよね。先ほど、インタビュー開始前に、それらのメニューを私も頂いたんですけれども、あらためて紹介をさせていただきますと、まず、「すだち醤油饂飩」。スダチを絞って、お醤油をかけてまぶして食べるわけなんですけれども、さっぱりしていておいしいですね。

（平井さん） ありがとうございます。

———で、「さびうどん®」なんですけれども、これ、ワサビで食べるうどん。やっぱりうどんにワサビをまぶして、お醤油をかけて、汁はないんですよね、そんなおうどんなんですけれども、こんなにワサビが主役になれる。それでいて、うどんと合っているという、この調和が何とも言えずに……。

（平井さん） ありがとうございます。

———おいしくて、ワサビを調整しながら、いろんな味わいがあるんだなあなんて思って食べたんですが、また、お醤油って甘いんだなっていうのを感じたんですよね。

（平井さん） ありがとうございます。醤油も、うどんに合うような特別なものでございます。

▲うどん洋食WASTA®シリーズ・「かるわなーら®」

———「かるわなーら®」は、黄身と、それからベーコンが入っていて、まさに見た目はスパゲティのカルボナーラのようなんですけれども、これ、混ぜて食べて、途中でお醤油をかけてもいいんですよね。

（平井さん） はい。お醤油を初めに軽くかけていただいて、よく混ぜて召し上がっていただくことで、まさに「かるわ」の「わ」部分が、うどんであり、醤油であり、そして、最後にご飯を、「追飯」として残ったソースに投入していただいて、和、和、和という三位一体の調和で、「かるわなーら®」ということになっております。

———なるほど。

（平井さん） 最後のご飯も、リゾットっぽかったでございましょう？

———そうですね。リゾットのような、高級卵かけご飯のような、そんな味わいで、やっぱり黄身も引き立っていたなあと思いますけど……

（平井さん） ありがとうございます。

———うどんと合うんですね。

（平井さん） 素材が、そこに向かわせていただきます。

———「わぽりたん®」、これ、トマト味で、スパゲティの、まるでナポリタンのようなんですけれども、うどんとトマトソースって、こんなに相性がいいんですか。

（平井さん） そうですね。そこがやっぱり、うちの手打ちうどんじゃないと、この味が出ない。いろんなチャレンジをされるお客さまもいらっしゃるんですけれども、「やはりうちのうどんじゃないと」ということで、皆さん、召し上がっていただいております。

———「乾咖喱®饂飩」もありました。これ、カレーうどんだと思うと、ちょっとイメージが違いますよね。まず、汁はない。

（平井さん） ない。

———で、おうどんの上にカレーのルーが載っていて、それを混ぜて頂くんですけれども、本格的なんですよね、このカレーのルーが。

（平井さん） ありがとうございます。普段カレーうどんを、召し上がっている方でも、多くが、乾めんをゆでた上にレトルトカレーをかけたようなカレーうどんがほとんどだっていう方が、「これこそ本当のカレーうどんだな」っていうことをおっしゃっていただいています。

———さらには私、驚いたのが、デザートのプリンです。このプリンも手づくりなんですって？

（平井さん） ありがとうございます。はい、カラメルも私の手づくりです。

———本格的スイーツですよね。

（平井さん） ありがとうございます。

———濃厚で、しっかりしていて、遠くからこのプリンが欲しいというのでいらっしゃる方がいるんですって？

（平井さん） はい、都内からもリピーターの方がいらっしゃいます。デザートがうちになかったものですから、この半年で出したんですけれども、やっぱりそこで「かるわなーら®」に使わせていただいている卵があって、その卵を活用させていただくもので、世代を問わず召し上がっていただけるものはプリンかなということで、おつくりしたものです。

———こうしたメニューを開発する際、どんなふうに考えてメニュー考案をするんですか。

（平井さん） はい。風土にある素材を使いまして、その素材の一番よさを引き出させていただく形で、メニューを組み立てます。その上で、「奇をてらったものでない」ように、例えば「かるわなーら®」であれば、それが本当に「皆さんがおいしいとしているカルボナーラを超えるものかどうか、そうでなければお出ししない」といったような考え方、

そこをやはりいろいろ食べながら、皆さんに召し上がっていただきながら構築をしていきます。
———メニューの名前も、またユニークですよね。
（平井さん）はい。
———これも平井さんのネーミングですか。
（平井さん）はい。あくまでうどんが和でございますので、その和というところをぶれない形の、名付けになっています。
———そして、気になったんですけれども、メニューの名前のところにアルファベットのRを丸で囲んだ、これ、マークが付いていますよね。もしかして、登録商標を取っているということですか。
（平井さん）はい。商標として登録させていただいております。自分の料理にちゃんと自信を持って提供するのであれば、やはり名前というのは大事だろうと思いまして、登録させていただきました。
———それだけ、一つ一つのメニューに誇りを持っていらっしゃる、責任を持って取り組んでいるということなんですね。
（平井さん）はい。ありがとうございます。
———今後の目標を教えてください。
（平井さん）目標というと、右肩上がりでなくちゃいけない、大きくしなくちゃいけないというような感じが、どうしても世の中、あると思うんですけども、自分の場合は、背伸びしてどうこうというんじゃなくて、やっぱり地に足を着けて、この風土に根差したところで、そしてこの渡し船のあるまちの中で、「小さくともキラリと光る店」を目指していければなというふうに思っています。
———「千代田饂飩でなくては駄目なのよ」というお客さまが、今後も増えていくといいですね。
（平井さん）ありがとうございます。
———今日はいろいろなお話を本当にどうもありがとうございました。千代田町赤岩の千代田饂飩、平井康裕さんにお話を伺いました。ありがとうございました。
（平井さん）ありがとうございました。

●エピローグ

夢への挑戦をテーマに、明日へ向かって走っている人を応援する番組「チャレンジ・ザ・ドリーム」。今日は、番組前半は、業界１位の売上高を誇る前橋市のカネコ種苗株式会社の金子昌彦社長へのトップインタビュー、そして後半は、こだわりのうどんを提供している千代田町赤岩のお食事処「あぜみち＆千代田饂飩®」への訪問インタビューをお送りしました。トップインタビューの模様は、ポッドキャスト配信も行っています。高崎市の黒沢病院などを運営する医療法人社団美心会の黒澤功理事長へのトップインタビューをアップしましたので、FMぐんまホームページの「チャレンジ・ザ・ドリーム」のサイトをご覧ください。

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」、この番組は「頑張るあなたを応援します！群馬県信用保証協会」の提供でお送りしました。ご案内役は、私、奈良のりえでした。

ＦＭぐんまと当協会の共同制作番組
チャレンジ・ザ・ドリーム
～群馬の明日をひらく～
【３月の放送のお知らせ】
平成28年３月３日（木）12:00～12:55
再放送　３月５日（土）8:00～ 8:55
ぜひお聞きください！